

心を澄まし、声を掛けよう



8月23日、大教会祭典後、布教実動を実施

布教講話を務められた村田幸喜先生とともに、大教会周辺で神名を流した

真 朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

「心の澄んだ人の言う事は、聞こゆれども、
心の澄まぬ人の言う事は、聞こえぬ。」

『逸話篇』 176 「心の澄んだ人」

二代真柱様は「天理教とはどんな教えですか？」と尋ねられたら、この私を見てくださいと答えられるようになってほしい」と仰せくださいました。ようばくお互いは、常に周囲から「天理教の人」として見られています。親神様への感謝の姿、喜びの姿が周囲に自然と伝わるように、陽気ぐらしに相應しい表情、雰囲気、話し方を身につけ、声を掛けずとも自然とに在いがけになるような「成程の人」へと成人したい。

そのためには、八つのほこりとお教えたたく、自分勝手な心遣いを払うことが大切です。我欲で汚れた心から出た言葉は、周囲の心には届きません。親神様の思召を見つめ、教祖のひながたを慕い、心のほこりを払い、ひのきしんの態度で歩む毎日の姿が、お道ならではの「にをい」となるのです。

私たちようばくの普段の姿が、自然と周囲に映ります。「この私を見てください」と言えるよう、おつとめ、おたすけ、ひのきしんなど教えの実践を通して常に心を澄み切らせ、身近な方に声を掛けて、信仰の喜びを伝える努力を重ねましょう。

正面四方

先日、熊本地震から1カ月ということで、現在の復興状況等の特集をテレビでやっていました。大勢のボランティアの援助もあるものの、大人から子供まで、ご近所総出で協力して、被災家具や瓦礫の撤去、搬出を行っている姿が印象的だった。

最後に、お年寄りの1人住まいの家屋で片付けを手伝っていた4、5歳の女の子にマイクが向けられ、これからの思いを問われて、「たくさんの人をたすけたいです」と、笑顔で答える姿に胸が熱くなった。

国の内外で起こる大ふしは、私たち人間がたすけ合い、人だすけの心を取り戻すよう、度重ねてお見せいただくものと聞かせてもらう。

ただ今は、にをいがけ強調の月。にをいがけ、おたすけこそ、最高の人だすけの姿である。親神様の思召にお応えできるよう、努めさせていたと思う。

《8月月次祭 挨拶》

道の辻で会うても掛けてくれ

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、残暑、実に厳しき中をご参拝くださり、8月の月次祭を滞りなく勇んで勤めさせていただきましたことは、大変ありがたいう次第でございます。

さて、今年の「こどもおちばがえり」に、芦津からは一千114人がおちばに帰らせていただきました。少年会員は639人でしたが、その内の130人は初参加者です。少年会員が声を掛け、にをいがけをして帰参した子供たちがいることを考えれば、これは少年会員のにをいがけの成果であり、教祖もきつとお喜びくださっているに違いないと思います。参加した少年会員たちは、夏の親里の楽しい思い出をつくってくれたでしょうし、何よりも一人ひとりにおちばの尊いお徳を頂戴できたことが実にありがたいことです。

また、731人の学生が参加して開催された「学生生徒修養会・高校の部」は、同じ世代のお道に繋がる仲間が大勢いることに、喜びや勇気を得た高校生が大勢いたと思います。地元では得がたい感動を得たことが、参加者一人ひとりのこれからの人生と、信仰の種になるんだと頼もしく感じています。子や孫に、信仰の喜びを伝えていく縦の伝道を考えますと、おちばのありがたさと、育成活動の重要性を思わずにはおれません。これからも信仰を代々

に繋げていく努力を怠らないようにしたいものです。

来月の月次祭は、本部学生担当委員会の中山祥吉委員長をお迎えして、学生層育成者講習会を開催します。学生層というのは、思春期を迎え、自我に目覚めていく時期であり、物事を懐疑的に見たり、反発を覚える世代です。信仰に対しても同様ですから、この世代に信仰を伝えるのは難しいですが、こうした時期に信仰に目覚めると、それが自分自身のアイデンティティになります。信仰心の発露です。この世代に、信仰を伝えるヒントや、気づきを得るうえで、来月の月次祭もご参拝をいただきたいと思えます。さて、9月は「にをいがけ強調の月」になります。にをいがけについては、先ほど村田先生のお話にあったように、

どんな所にをい掛かるも神が働くから掛かる。なか／＼の働き言うまでやない。出るや否や危なき怖わき所でも守護するで通れる。

明治26年7月12日

どんな処へにをい掛かるも、皆入り込んでの自由と聞かし置かう。

明治25年12月17日

と、こうしたお言葉を頂いています。

にをいがけは、ようぼくや信仰者がするわけですが、実際ににをいが掛かるかどうかは、親神様のお働きで掛かるのだとお教えになっていきます。しかも、にをいがけに出れば、たとえ危なく怖い所であっても、親神が守護してやる、とまでお約束してくださっているのです。にをいは親神様が掛けてくださるのなら、私たちようぼくは何をすればいいのか。それは親神様が入り込んで自由にお働きをしてくださることを信じて、自信を持って、そこに少しの勇気を加えて、声を掛ければいいのです。

ところで、このにをいがけ強調の月に関しては、最初の 1 週間を、教会長実動週間、月末の 3 日間を「全教一斉にをいがけデー」と発表がありました。出だしを、教会長が率先垂範して実動し、月末の 3 日間は、教会長、ようぼくがこぞって活動して、強調の月の締めくくりとさせていたたく、ということです。

この強調の月の打ち出しを受けて、大教会としては、3 つの取り組みを申し合わせています。それは「各教会の祭典日で布教実動しよう」「1 人が 3 枚のリーフレットを手渡そう」「大教会での毎日神名流しの実動」の 3 点です。ここで大切なことは、にをいがけを単なる行事として捉えるのではなく、にをいがけ、布教ということを常に意識して、ひと月を過ごすことが大切です。具体的に言えば、「声を掛ける」こと、「教えを語り伝える」こと、そして「おさづけを取り次ぐ」こと。これらを意識の中に置いて、通らせていただきたいのです。そうした上から、次のお言葉を頭の中に入れていただきたいのです。

この人になをいを掛けんならんと思えば、道の辻で会うても掛けてくれ。これからこれが仕事や。 明治 40 年 4 月 7 日

とのお言葉です。これが、ようぼくに寄せる、教祖の切なる思いです。このお言葉を、覚えておいていただきたいのです。そして、このお言葉にお応えできるように、声を掛けること、教えを語り伝えること、おさづけを取り次ぐことを常に意識しながら、にをいがけ強調の月を、共に勇んで通らせていただきたいと思います。今月は祭典後に、神名流しを予定しています。これは勇みの種として、にをいがけ強調の月に繋げたいとの思いから実施するものです。奮ってご参加をいただきたいと思います。

(要約)

立教百八十九年 八月 月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の豊かな御恵みに護られて、恙なき日々の御守護を賜り、厳しくも温かき親心を掛けて世界一れつをお育て下さいます御慈愛の程は、誠に有り難く勿体無い極みでございませう。又、今年のこともおちばがえりに各地より帰らせて頂きました少年会員、育成会員には、尊きをやの息をおかけ頂き、尚又、大きな事故もなく、大難を小難に、小難を無難にお連れ通り頂きまして、楽しい思い出を胸に国々処々へ戻らせて頂きましたことは、大変有り難き次第でございませう。更には学生生徒修養会高校の部に参加した学生達は、おちばのお徳を頂いて、同年代の子弟と共に御教えを求め、大きな夢と感動をお与え頂きました。こうして夏の親里で、次代の道を担う子弟にお掛け頂きました温かき親心に、重ねて御礼申し上げる次第でございませう。

斯くも果てしなき御守護と温かき親心にお導き頂きます中に、今日の吉日はおちばよりこれの教会にお許しを頂きました芽出度き日柄でございませうので、只今から役目にあずかる者一同心を揃え、座りづとめ、陽気てをどり勇んで勤めて、八月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、残暑厳しき中をも今日の日を持ちかねて参らせて頂きました芦津の道の子供達が、親も子も一つ心に伏し拝み、つとめの理に添い切る真心の状をも御照覧頂きまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

尚、今日の神殿講話は、本部布教部次長・村田幸喜先生に、布教講話としてお務め頂きます。来月に、にをいがけ強調の月を迎える旬に在って、私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、まず一人ひとりが成程の人への成人に努めて、信仰の有り難さ喜びを周囲に伝え広め、身上や事情で悩み苦しむ人には積極的におたすけをさせて頂いて、真にたすかる道へと導かせて頂けるように、真心を尽くさせて頂く所存でございませう。何卒、各々が尽くす真実をお受け取り下さいまして、時旬に相応しい成人の道を歩ませて頂き、たすけ一条に馳せ回る教会長、ようぼくには不思議自由の御守護を賜りまして、一日も早く陽気ぐらし世界へお導き下さいませう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《8月月次祭 布教講話》

喜び心で

にをいがけ、おたすけを

本部員・本部布教部次長 村田 幸喜先生

何とか喜んでもらいたい

7月末に熊本で大地震が起こり、8月には千葉県で大きな水害が起こりました。被災されました方々には心よりお見舞い申し上げます。

天理教には災害救援ひのきしん隊というものがあり、8月6日から21日まで延べ80名の隊員が熊本の被災地で活動しました。私も19日から21日まで被災地で活動させていただきました。

20日は、あるご婦人宅のブロック塀を解体、撤去するひのきしんをしていました。ひのきしん中、家主のご婦人はずっと私たちの姿を見ておられたのですが、瓦礫をトラックで運搬している間、休憩していますと、ご婦人が鍬を持ってきて、庭の草抜きをし始めたの

です。私もお手伝いをしようと草を抜き出すと、「そんなことしなくていいですよ」とおっしゃったのですが、「天理教は草抜きが得意ですから」と言ってお手伝いをさせていただきました。

トラックが戻ってきて、駐車場でお昼ご飯を食べようとしたら、「どうぞ皆さん、暑いから家の中で食べてください。うちは電気が通ってクーラーも入りますから、ぜひ家の中で」とおっしゃるので、再三辞退したのですが、どうしてもとおっしゃるので、家にはちょうど天理高校が甲子園で試合をしており、テレビで天理高校の試合をつけてくださったのです。更に冷蔵庫から手作りの漬物や野菜などを出してくださいました。

そのご婦人は「私は地震が起きてから今日まで、ご飯を作る気持ちにもなれなかったし、もう生きていけないと思って何もする気にならなかつたけれども、今日皆さんの姿を見て、本当に元気を頂いた。今日からもう一回頑張ってみよう、前を向いて歩いてみようという気持ちになりました。ありがとうございます」とおっしゃった。その言葉を聞いて涙が出そうになるぐらい嬉しく思いました。

「天理教」という文字が入ったヘルメットや服を着た災救援隊が家に入ると、知らない方は「宗教の人が来た」と思われてか、距離を置く方もいるのです。しかし、隊員が「何とか喜んでもらいたい」と思って一生懸命勤めていると、最後にはほとんどの方が涙を流して喜んでくださいます。災救援は、布教は一切できないのですが、天理教という看板を背負って真実を込めてひのきしんをしていれば神様が働いてくださって、相手の心に届くのだと感じました。

布教も同じだと思います。毎日布教をしていても、理解されない

こともあるかもしれません。けれども、真実を積み重ねていけば、それを親神様、教祖が受け取ってくださいたら、必ず相手の心に伝わっていくのです。

私たちが動くこと

今日は皆さんに、「にをいがけ、おたすけは、決して一部の熱心な人だけがするものではない」ということを、まずお伝えしたいと思います。

にをいがけ、おたすけというと、何となく身構えてしまう人がいます。「私は布教が苦手です」「戸別訪問はちょっとできません」「路傍講演なんて、とても無理です」と思われる方もおられるでしょう。

しかし私は、もっと身近に、もっと日常生活の中でにをいがけ、おたすけを考えていいと思っています。お腹がすいたらご飯を食べるように、お道を知らない人が目の前にいたら、一言声を掛けてみる。病んでいる人がいたら、おさづけを取り次がせていただく。困っている人がいたら、話を聞く。悩んでいる人がいたら、教会やお

ちばに繋いでみる。日々の暮らしの中で、周囲の人々にそれが自然にできるようになれば、本当に素晴らしいと思います。

どんな所を、い掛かるも神が働くから掛かる。

明治 26 年 7 月 12 日
どんな処へを、い掛かるも、皆入り込んでの自由と聞かし置こう。

明治 25 年 12 月 17 日
にをいがけ、おたすけは、私たち人間の力だけするものではありません。親神様がお働きくださり、御存命の教祖がお導きくださる。私たちは、親神様、教祖の手足となつて動くのです。
だからこそ、私たちが動くこと



が大切なのです。世界一れつをたすけたいという親神様の親心。その親心を、ひながたを通して身をもつてお示しくださった教祖。その思いを受けて、ようぼくである私たちが一歩動く。そこに親神様、教祖がお働きくださるのです。

昨年、布教の家の寮生が出発する朝、真柱様が 7 年ぶりにお言葉をくださいました。その中で、教祖のひながたの道は誰にも相手にされないところから始まったことに触れた上で、「教祖が相手にされない中を通られた年限は、布教の家の 1 年よりも、何倍も何倍も長かった。そこを通られたのだから、相手にされない時期が続いても、心を倒さずに通りぬく気持ちがいかに大切であるかを教えられていると思う。また様々な節を通して、困難な状況の中でも立ち向かう勇氣と、そして根氣が大切なことを教えてくださったと思う」とお話しくださいました。

教祖のひながたの大半は、まだ誰も教えを知らない時代に、「どうすれば親神様の御守護を分かってもらえるだろう」どうすればこの

教えを人々に伝えられるだろう」と、誰にも相手にされない中を、親神様の思召を伝えるために勇んで通られた歩みです。

にをいがけに出て、「こんにちは、天理教です。お話を聞いてください」「いいえ、結構です」。友人や知人に「悩んでいたら、一度天理教の話を聞いてみませんか」「いりません」。病氣の人に「天理教の神様のおさづけというものがあるから、一度願わせてほしい」「いや、私は結構です」などと、ほとんど断られます。しかし、断られたときに「ダメだったな、無駄だったな」と思う必要はなく、「今日も教祖のひながたを少し辿らせていただいた」と思えばいいのです。にをいが掛からなくても、教祖のお供をして歩かせていただいた。それだけでもありがたいことではないでしょうか。

教祖のひながたを振り返ると、安政 4 年、立教 20 年で、初めて信者が 4 合のお米を持つてお札に來たと残されています。それを思えば、私たちがにをいがけに出て断られることは、本当にありがたい

ことで、「教祖のひながたを辿らせていただいている」と喜ぶことが大切ではないでしょうか。

また、せっかく繋がつても途中で切れてしまう方もおられます。これも『教祖伝』を繙くと、親から子に信仰を続ける人が出てきたのが文久元年のこと。立教 25 年になつて初めて、親から子に信仰が伝わる人が出てきているわけです。たとえうまくいかないことがあつても、「教祖でもそういう中を通られた」と思えば、喜び心が湧いてくると思います。

断られる中に

私は布教を続ける中で、「断られることにも値打ちがある」「相手にされないところにも意味がある」と思うようになりました。

陽氣ぐらしの教えを伝えようとしても、誰にも相手にされない。時には笑われ、嫌なことを言われる。しかし、そこで心を倒さず、喜んで続ける。そこに教祖のひながたを辿る大切な意味があると思います。

極端な言い方をすれば、にをい

が掛からなくてもいいのです。もちろん、にをいが掛かって、人がたすかってくださることを願っていますし、おぢばで別席を運んでいただき、ようばくになつていただきたいと思います。しかし、それらの結果だけを求めるのではなく、「今日も教祖のお供をして、教祖にお喜びいただけるにをいがけをさせていただいた」と喜ぶ、その積み重ねが大切だと思います。にをいが掛かっていないと思っても、実は掛かっていることがあります。

布教部がおぢばで開催している「基礎講座」に、ある日1人の男性が来られましたが、その時間は受講者がその人だけでした。基礎講座が終わったとき、講師が、「今日はどうして来たのですか？」と理由を尋ねると、「ホームページで調べて来ました」とおっしゃる。詳しく話を聞くと、ある日、仕事が終わって家でくつろいでいるとインターホンが鳴って、奥さんがやり取りしてガチャッと切ったそうです。「誰だったの？」と聞くと、「天理教が来たから、断っておい

た」とのことでした。その後、パソコンを触っていると、「さつき天理教の人が来たって言ってたな」と思つて、インターネットで調べているうちに、「なかなかいい教えだな」と思い、天理教の信者でなくとも誰でも聞ける「基礎講座」があると分かつて、行ってみようと思つて来たのだそうです。

そこで、講師が神殿案内をしておつとめも教え、もつと教えを知りたいということで、別席を運んでようばくになられ、家に神様を祀ることになりました。

その家のインターホンを押した方は「今日も断られた」と思つているかもしれませんが、神様の不思議なお働きがあれば、そこからようばくが誕生しているのです。

だから私たちが戸別訪問、神名流し、路傍講演をしてそこで何も無いと思つても、回り回つて神様にお働きたいだと、不思議なことがあるのです。ですから、ようばくが動くことが大切なのです。

信仰の喜びを日々培う

『逸話篇』に、教祖が、

「あんたの救かったことを、人さんに真剣に話さして頂くのやで。」

100 「人を救けるのやで」と仰せられた、とあります。私はここが、にをいがけの原点だと思います。

難しい教理を説明できなくても、立派な話ができなくてもいい。自分がたすけていただいたことを話す。「私はこの教えで、こんなふうに心が変わりました」「教会でこんな喜びを頂きました」「苦しいときに親神様、教祖にもたれて、こうして通ることができました」「私の親が、祖父母が、親神様にたすけていただいて、今があります。本当にありがたい信仰です」と、自分自身の信仰の喜びを真剣に伝える。それがにをいがけです。

二代真柱様は、「布教とは信仰の喜びを伝えることである」とお教えくださっています。ですから、布教する側の私たちに「信仰の喜び」があることが大切です。にをいがけは、嫌々しては続きません。「しなければならぬ」では苦しくなります。「今日も親神

様への御恩報じができる」「今日も教祖のお供ができる」と思えば、にをいがけは喜びになってきます。そして信仰の喜びは、誰かから与えてもらうだけではなく、自身で日々培つていくものだと、私は思っています。私にとって、信仰の喜びを培っていく実践の一つが路傍講演です。

10年前、教祖百三十年祭に向かう三年千日のとき、家庭の大きな事情の節の中にいた私は、「路傍講演1千回」を心定めました。そして教祖百四十年祭に向かう三年千日では、1千100回を心定めしました。1回路傍講演をしたからといって、何かが起こるわけではありません。駅前で10分15分話しても、誰も聞いてくれない日がほとんどです。けれども、「今日も教祖のお供をさせていただいた」という喜びを、1回、また1回と積み重ねてきました。

毎日布教を始めたときは、「意味があるのかな？」と思つたことが何回もありました。しかし、200回500回と続ける中に、不思議な御守護をたくさん見せていただくよう

になりました。普段、私もいろいろなほこりを積んでしまっています。

しかし、にをいがけに出ると、低い心にもなれるし、神様の思いも心に治まってきます。

続ける中に、不思議な御守護をたくさん見せていただくようになりました。駅前での路傍講演で出会った人の中に別席を運ぶ人が出てきて、その中からようほくになつた方もいます。教祖百三十年祭の三年千日に、教会として初席者を110名お与えいただきましたが、私は110名という数字そのものよりも、なかなか御守護が現れない中でも、にをいがけを続けることの大切さを教えていただいたことが、本当に一番大きな御守護だったと思っています。

声を掛けたという真実

私が路傍講演をしているからといって、皆さんにも路傍講演をしてくださいと言っているわけではありません。私には、これが一番続けやすかっただけなのです。皆さんには、皆さんにできるにをいがけがあります。何か自分にでき

ること、続けられることを見つけていただきたいのです。

家族や親戚、友人、職場の人。お道を知らない人との繋がりも、皆さんにもあると思います。そういつた方々に「私は天理教を信仰しています」と伝える。それだけでも、一つのにをいがけです。

そして日頃から、「この人の言うことなら聞いてみよう」と思ってもらえるような信頼関係をつくる。困ったときには話を聞く。病んだときには「よかったら、おさづけをさせてもらいましょうか」と声を掛ける。何か人生の節に出会ったときには、「一度、教会に来てみませんか」「一緒におちばへ帰りませんか」と声を掛ける。

断られてもいいから、声を掛けることが何より大切です。その方のたすかりを願って、声を掛けたという真実が残るのです。立派なにをいがけであり、徳積みにもなりますし、教祖も必ず喜んでくださいます。電話でも、メールでも、LINEでも、手紙でも、SNSでもいい。大切なのは、「この人にとすかつてもらいたい」という真

実の心で、一言声を掛けることなのです。

教祖百年祭に向かう「論達第三号」に、一言のにをいがけは、人の運命を変える。それは、をやの声を聞く時、心の向きが変わるからである。

とありました。一言が、その人の人生を変えることがあるのですから、難しく考えなくていいと思うのです。声を掛けるところまでは、私たちができることです。その人がおちばへ帰ってくださるかどうか、おさづけを取り次がせていただけるかどうか、おさづけを取り次いで、どのような御守護を頂くか。そこは親神様、教祖のお働きの世界です。

私は、にをいがけ、おたすけには、「人間の領分」と「神様の領分」があると思っています。私たちは人間の領分を一生懸命つとめることが大切だと思います。

そう考えると、にをいがけは、ずいぶん楽になります。たすけ主は親神様、教祖で、私たちはその手足として使っていただければい

いのです。

こうまんのほこりを払って

布教をしていてありがたいと思うのは、心を低くできることです。戸別訪問をすれば、「こんにちは。天理教です」と頭を下げます。チラシを配っても、受け取ってもらえない。路傍講演をしていれば、「何をしているのだろう」と思われるし、酔っ払いにからまれたり、若い人からからかわれることもあります。けれども、それがありがたいと思つて続けています。

20年以上前、私が「布教の家」福岡寮へ入寮するため、大阪南港からフェリーに乗ったとき、天理教校本科時代の恩師から電話が掛かってきました。

「布教に行ったら断られて、誰も話を聞いてくれないかもしれない。でも、話を聞いてくれないのがあるがたい。断られるのがあるがたい。1年で別席者を何人も御守護いただいたても、こうまんになった。らお前の信仰はそこで終わり。誰一人話を聞いてくれないでも、1年間頭を下げ続けて心が低くなつ

たら、それでいい。10年、20年経ったら大きな御守護を頂ける」。この言葉が、今も私の信仰の根本、布教の根本にあります。

そしてこれは私の勝手な悟りですが「あの電話は御存命の教祖からの電話だったのではないか」と思うことがあります。「お前は生涯、心を低くするために布教するんやで」と、教祖が言ってくださったと感ずるのです。

ですから私は、生涯にをいがけを続けたいと思っています。こうまんなは一番出やすく、一番大きなほりである、とも教えていただきます。こうまんのほりが、親神様の御守護を頂けなくなる元になるのだから、にをいがけで断られて頭を下げて通ることは、一番こうまんのほりを払うことになるし、これほど徳を積めること、ありがたいことはありません。こうまんのほりを払うと、必ず親神様の御守護、教祖のお働きを頂けるようになると思うのです。

自分自身のたすかり

今でこそ、こうして皆さんの前

で布教の話をしていますが、10年前、教祖百三十年祭の年祭活動が始まる頃、私は人生のどん底にいました。家庭内の事情が行き詰まり、本当に八方塞がりでした。毎日「なぜこんなことになったのだろう」と悩んでばかりいました。「布教の家」の頃はあれほど勇んで布教していたのに、その後は本部の御用を言い訳にして、布教に真剣に心向けられなくなり、さらには自分自身の家庭の事情で悩み苦しみ、つらくて悲しい日が続いていました。そんな自分が情けなくて仕方ありませんでした。

そんなときに、教祖百三十年祭に向かう「論達第三号」を拝し、「もう一度、真剣ににをいがけをしよう。三年千日、毎日布教をさせていただく」と心から思うようになりました。当時は本部青年で、朝づとめから夕づとめまで御用がありましたが、「路傍講演なら10分でも15分でもできる」と思い、「三年千日で1千回」という心定めをしました。そして、御用の合間に天理駅などで路傍講演を始めました。

最初の1年は、誰一人にをいが掛かりませんし、事情も全く好転しませんでした。周囲からも「天理駅でやつても意味がない」など、いろいろなことを言われました。しかし、「これは親神様との心定め、約束だ」と思って何とか続けていきました。ちょうどその頃、勤務先が別席場に異動になり、布教熱心な先生方から刺激を受けて、前向きになっていきました。

2年目ぐらいから、少しずつ不思議な出会いを頂くようになりました。別席者をお連れしたり、身の上の方のおさづけに通ったり、戸別訪問で出会った方の家におたすけに行ったりする中で、いつの間にか、自分自身の心が、人のたすかりへと向くようになっていました。毎日にをいがけに出ているうちに、いつしか「人をたすけよう」という心になっていき、自分自身の心をたすけていたのだのです。自分の悩みが悩みにならなくなり、自分の事情は親神様、教祖にお任せして、日々のにをいがけ、おたすけ、別席者の丹精に心が向くようになってきたのです。

また一番苦しんでいたとき、真柱様が御宅に呼んでくださり、「今、家の中はどうなってるんや?」と尋ねられたことがありました。私は覚悟を決めて、家庭の事情を洗いざらい、正直に申し上げました。そして、どんな厳しいお仕込みを頂くのだろうと思つて身構えていると、真柱様は「言にくいことを喋らせてしまつて、すまなかったな。時間薬というものもあるから、心を倒さずにしっかり勤めてくれよ」と仰つてくださいました。そのお言葉に私は心をたすけていただきました。別席場のトイレで泣くだけ泣いて、また御用に帰ったことを、昨日のことのように覚えています。本当に大きな親心で抱えていただきました。

親々がずっとおちばで勤めてくれていたお陰で、真柱様、前真柱様をはじめ、多くの方々に支えていただき、心を倒さず通ることができたのだと思います。そのご恩に少しでも報いたいという心も強くなってきました。私には大したことではありませんが、「今日もにをいがけをさせていただこう」「今日

も少しでも教祖にお喜びいただけ
ることをさせていただこう」と思
って、ささやかですが、自分でで
きるにいがけと思つて、駅前で
の路傍講演を続けています。

本当のたすかりとは

「身上、事情は道の花」事情なけ
れば心が定まらん」ともお教えい
ただきます。10年前、事情の節を
頂いたとき、「なぜこんなことにな
ったのだろう」と悩んでばかりい
ました。しかし、今振り返れば、
この節があつたから、にいがけ、
おたすけに真剣に心を向けること
ができた。もし何事もなく、すん
なりと教会長になつていたら、私
の癖性分からすれば、こうまんで
口先だけで、布教もしない、苦勞
している信者さんの気持ちも分か
らない教会長になつていたかもし
れません。

節によつて、私の心は布教へ向
かうことができました。そして、
教祖百三十年祭活動のときににを
いがけ、ようぼくになつた大
工さんが、教会の神殿修築普請で
棟梁を務めてくださり、神殿普請、

付属建物修築普請をさせていただ
きました。初席者は、この13年で
295名、ようぼくを85名お与えい
たできました。私の事情はまだ道中
ですが、薄紙をはがすように、少
しずつ良い方向へ向かつていると
思います。「節から芽が出る」と
いうことを、自分の人生を通して
教えていただいています。

『逸話篇』の中に、147「本当のた
すかり」というお話があります。
身上が少し残っている方が、それ
を悟れるから本当のたすかりだ、
という内容の逸話ですが、最後に、
「おふでさきを、生涯、いつも読
ませて頂いていた。そして、誰を
見ても、熱心ににいをかけさせ
て頂き、八十九才まで長生きさせ
て頂いた」とあるのです。

私は、これこそが本当のたすか
りではないかと思うのです。身上
や事情がうまくいかなくても、毎
日ににいがけをさせてもらえるよ
うな心になつたら、それが私たち
の本当のたすかりではないか。だ
から、にいをいがけからなくても、
毎日ににいがけをさせてもらえる
自分になれば、それが親神様、教

祖が望まれるようぼくの姿です。
もしかししたら、私の今の姿が、自
分のたすかった姿に近づいている
のではないかと思うのです。

だから皆さん、にいをいがけを難
しく考えないでください。断られ
ることを恐れないで、まず一言、

声を掛けてみてください。病んで
いる人がいたら、おさづけを取り
次がせてくださいと声を掛けてく
ださい。そして、おさづけを真剣
に取り次いでください。困ってい
る人がいたら、話を聞いてくださ
い。そして、「一緒に教会へ行きま
せんか」「一度おちばへ帰りませ
んか」と声を掛けてみてください。

結果は親神様、教祖にお任せす
ればよい。私たちは、私たちので
きることを、喜んで勇んでコツコ
ツと続けていく。その一步一步が、
御存命の教祖のお供することに
なるのだと思います。そして不思
議なことに、人をたすけようとし
て歩いている私たち自身が、いつ
の間にかたすけていただきます。
にいをいがけ、おたすけは、苦し

い信仰実践ではなく、親神様、教
祖への御恩報じであり、教祖のひ

ながたを辿る喜びです。そして、
私たち自身が成人し、たすけてい
ただく道でもあります。私たちの
一步一步を教祖は必ずご覧くださ
り、手を引いてお導きくださると
信じています。

来月9月、「にいをいがけ強調の
月」を迎えます。どうか皆さんも、
「私にもできる一言がある」「私に
もできる実践がある」と思つてい
ただきたいと思っています。

そして、一人でも多くのようぼ
くが喜び心で一步一步を踏み出せば、
そこに親神様がお働きくださると
御存命の教祖がお導きくださると
思います。その一人ひとりの小さ
な実行の積み重ねが、やがて世界
の陽気ぐらしに繋がっていくのだ
と信じています。親神様、教祖に
お喜びいただけるよう、共に、
喜び勇んでにいをいがけ、おたすけ
の道を歩ませていただきますよう。
今日のお話が、皆様方が一歩を
踏み出していただくきっかけにな
れば、これほどありがたいことは
ありません。

本日は誠にありがとうございます
でした。

創立130周年記念祭

門司分教会

門司分教会（望月慶太会長・福岡県北九州市）は、8月30日、大教会長夫妻をお迎えして、創立130周年記念祭を執り行った。

門司の道は初代会長・谷岡卯之



助氏が一からにをいがけ、おたすけに奔走し、明治29年に門司出張所を開設したことに始まる。

記念祭では、望月会長の祭文奏上の後、大教会長が挨拶。「記念祭を勤めるにあたっては大切なことが2つある。1つは、初代会長をはじめとした、先人のやむにやまれぬ信仰心に思いを致すこと。2つ目は、この旬に、自分はこれからどのように成人させていたかどうかと思案し、実践していくこと」とお諭しくだされた。

その後、座りづとめ、よろづよ八首、前半下り、後半下りの4交替で、奉仕者延べ60名で賑やかに勤めた。

望月会長は「10年後には、1人1役で5交替でおつとめが勤められることを目標としたい」と決意を述べた。

その後、直会を開催。有志により詩吟や三味線の余興、からあげやフライドポテトなどの揚げ物、かき氷等が提供された。参拝者は103名であった。

八月月次祭 祭典役割

祭主	薦者	薦者	座りづとめ	前	後	てをどり	地方	ちやんぼん 拍子木 太鼓 すりがね 小鼓	三味線 胡弓	八月月次祭 祭典役割
大教会長	川畑澄博	薦者	瀧本庄司	薦者	榎康紀	大教会長 奥田正徳 今川政治 会長夫人 井筒ちぐさ 奥田富美子	湯川正罔 瀧本眞二郎 川畑澄博	山田道弘 井筒文夫 井筒敏成 竹内義忠 岩切正義 山本義範	望月恵美 岡島きよの 宗我邦代	湯川正罔 伝内義忠 竹本義範 山本義之 西本俊和 中本昭昭 岡本久昭 花岡里実 新居正一 西本興一 今川聖一 村田光伸 湯川裕樹 吉田信 川畑樹 瀧本亘 望月慶太 梶川和太 梶川芳征 宗我道明 吉田充人 菊池彦彦 橋爪弥 齊藤徹 金原明 川畑俊一 元木慎一
指図方	井筒文夫	浜田宣郎	薦者	薦者	薦者	加世田洋 荻内浩 石川健郎 松本さだえ 梶川文子 岩切治代	守田清一 瀧本庄司 木村真次	河合善洋 立花善三 西本義之 岩切正義 立花善文 瀧本耕四郎	加世田陽子 山田秀子 松森明美	
井筒文夫	井筒文夫	井筒文夫	薦者	薦者	薦者	新居里実 瀧本一太郎 瀧本千代実 浜田千代実 瀧本美奈 梶川正美	村田光伸 望月慶太 松森誠太	梶川和太 梶川芳征 川畑正博 吉田充人 岩切正義 西本興一 今川聖一	湯川照代 河合ふみ子 奥田千晶	
献饌長	湯川正罔	湯川正罔	薦者	薦者	薦者	新居里実 花岡里実 岡本昭昭 中本昭昭 西本昭昭 山本昭昭 竹本昭昭 伝内昭昭	湯川正罔 瀧本正罔 川畑正罔 吉田正罔 湯川正罔 村田正罔 今川正罔	湯川正罔 瀧本正罔 川畑正罔 吉田正罔 湯川正罔 村田正罔 今川正罔	湯川正罔 河合ふみ子 奥田千晶	

月次祭布教実動

布教部（竹内義忠部長）は、大教会8月月次祭祭典後、布教講話講師の村田幸喜先生、参拝者と共に布教実動を行った。

これは、9月のにをいげけ強調月間に向けて、芦津に繋がる教会長、ようぼくの布教に対する意気を高めるためのもの。

祭典終了後、14時15分に神殿に集合し、村田先生を芯に参拝した後、約70名の参加者が、4つの班に分かれ、大教会周辺の神名流しを行った。帰会后、竹内布教部長より9月の大教会のにをいげけ強



調月間の取り組みとして、「全教会が9月月次祭の日ににをいげけを」一人のようぼくが3枚のリーフレットを手渡そう「大教会毎日神名流し」を改めて強調し、共々に勇んだにをいげけ実動を促して終了した。

参加者からは、「暑い中でしたが、たくさんの方と共に神名流しに歩いて勇ませてもらった」「先生の話に勇ませてもらい、その勢いで布教実動ができ、さらに勇ませてもらった。この勢いで9月も勇んで歩かせてもらいたい」などの意見が聞かれた。

夏休みあしつ親子参拝

育成部（山田道弘部長）は、8月23日、信仰の喜びを伝えるため、夏休みに家族揃って大教会月次祭に参拝しようという提唱から始まった毎年恒例の「夏休みあしつ親子参拝」を実施した。

当日は、教会子弟をはじめ大勢の少年会員が、家族ぐるみで大教会の月次祭に参拝した。

祭典終了後には、参拝場では子供用のお下がり、食堂前では女子青年の協力を得て、かき氷が配られ、子供たちの笑



顔が溢れた。

夕づとめ後の直会では、大教会長を囲んでの会食。子供たちが喜ぶオードブル、食後にはお菓子やかき氷も配られ、子供連れの家族が大勢参加し、いつも以上に賑やかな直会となった。

直会に参加した育成会員からは、「夏休みに家族皆で大教会月次祭に参拝ができたことが、とてもありがたかった」「子供たち用のお下がりや、かき氷、直会ではオードブルまで用意してくださり、子供たちとても喜んでいた」といった声が聞かれた。



みちのだい育み塾

婦人会芦津支部（井筒年子支部長）は、大教会8月月次祭祭典後に「みちのだい育み塾」の取り組みとして、はぐくみマーケット（子供服の無料配布会）を開催した。

サイズ別に分かれた子供服や、絵本、文具などを用意し訪れた子育て世代の方々や子供たちの交流の場となった。

「みちのだい育み塾」は、子育て中の母親とその同年代の方を対象に、教えを正しく身につけ、親神様、教祖の親心を心に治める場として、毎月1度開催している。



学生生徒修養会・ 高校の部

今年も「学生生徒修養会・

高校の部」が8月9日から13日にかけて開催され、全国各地から731名の高校生がおどばに帰り集った。芦津からは10名が参加した。

今年も事前研修を重ねたスタッフのもと、「陽気ぐらしに必要なこと」向き合うことの大切さ」をテーマにプログラムが進められた。

不安と緊張の中、参加者たちは、グループワークや講話などを通して教えに触れ、レクリエーションや班員同士が語り合ったり、寮生活で寝食を共にする中で友情を育み、さまざまな場面で信仰の喜びを味わった。参加者らは、多様なプログラムを通して、教えを学び、お互いの信仰を磨き合って、数多くの仲間と楽しい5日間を過ごした。

参加者からは「行くときは乗り気ではなかったが、最高



に楽しくて、班の仲間との絆が生まれてよかった」最初は緊張したけど、みんなが優しくてすごく楽しかった」あつという間の5日間で、班員との心の距離も近くなって本当に楽しかった。来年も絶対来たい」などの感想が聞かれた。

【参加者】

菊池 結花（大関門）
吉田陽名子（紀 内）
菊池 七海（東大屋）
竹内 百花（稗 島）
高馬 佑依（浪華浦）
伊藤 百花（芦 姫）
中野 祐貴（丸 芳）

心を澄ます会

青年会

山下 陽助（芦山都）
畠中 歩（芦山都）
白谷 誠悟（四ツ山）
【本部スタッフ】
井筒 春来（直 轄）
井筒たつえ（直 轄）
山田 元喜（當 別）
木村 華恵（芦明徳）

8月30日、青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は、詰所において、青年会行事「心を澄ます会」を開催した。

当日は、芦津に繋がる青年会員とその家族など30名が参加した。

午前10時、詰所2階大広間で勉強会。はじめに『天理教教祖伝逸話篇』71「あの雨の中を」、また『真明芦津の道』より同逸話の詳細が記された箇所を輪読した。初代会長・井筒梅治郎様が豪雨の中、おどばへの参拝を決意された逸話を通して、教祖の思いに応



えようとする真実の心について学んだ。その後、2人一組に分かれ、逸話を読んで感じたことや心に残ったことを語り合った。

午前11時からは、初代様を偲び、豊田山のお墓地へ移動。歴代会長様、奥様方のお墓周りの草刈りなど、ひのきしんに勇んで取り組んだ。厳しい暑さの中であったが、互いに声を掛け合いながら汗を流し、清々しいひのきしんの時間となった。



ひのきしんを終えた後は詰所に戻り、懇親会を開催。10月27日に行われる天理教青年会総会前夜祭で出店する品の試食を行いながら、参加者同士で親睦を深めた。

今回の「心を澄ます会」では、教えを学ぶだけでなく、互いに思いを語り合い、ひのきしんを実践し、親睦を深める一日となった。今後も青年会活動を通して、日々心を澄ますことを意識しながら、一人ひとりが教祖のひながたを胸に刻み、たすけ一条の道を歩んでいきたい。

令和8年熊本地震

災害救援に出動

7月28日に熊本県で最大震度7の巨大地震が発生。周辺地域では水道や電気、高速道路といったインフラの寸断や1万棟を超える住宅被害に見舞われた。

天理教災害救援ひのきしん隊本部は、直ちに現地に給水車を派遣。熊本教区災害隊と共に給水支援を行い、その後も各教区から大勢の災害隊がひのきしんに駆け付けた。

井筒敏成・芦津分会委員長は、8月5日より10日まで本部隊として現場入り。一旦お



ちばに戻った後、11日からは青年会隊として再度現場に赴き、16日まで瓦礫撤去、残材の運搬などに励んだ。

また9月1日、2日には、芦津大教会在籍者を中心に、芦津災害救援ひのきしん隊を編成。四ツ山分教会（福岡県大牟田市）を拠点に、高校生、大学生を含む12名がひのきしんに出動した。



主な作業は倒壊した塀の撤去で、ハンマーで細かく砕いてからトラックで運搬した。

隊長の岩切正義・ひのきしん部長は、「2日間で被災宅3軒のブロック塀の撤去をさせていただき、依頼者に喜んで

いただきました。若い方が大勢参加してくれたお陰で、仕事もスムーズに進みました。これからも災害時に出動できるようにしたいと思います」と語った。

ファミリーの集い開催

島原分教会

8月16日、島原分教会（岩切正教会長・長崎県南島原市）は、夏恒例の「ファミリーの集い」を開催した。

月次祭終了後、午後3時30



分に神殿に集合して開会。岩切会長が挨拶に立ち、この集いは各会合同の総会であるとした上で、総会の意義と続けることの大切さを説いた。続いて全員総立ちで、よろづよ八首のおてふりまなびを勤めた。

その後、場所を屋外に移してバーベキューによる親睦会で、楽しい一時を過ごした。参加者は33名だった。

大教会外塀改修工事

ひのきしん

9月1日より、大教会の外塀の改修工事が始まった。

大教会の外塀は鉄筋や鉄骨が入っており、万が一大きな地震が発生した場合、通行人を巻き込む大きな事故に繋がりがかねないため、古い石塀を撤去し、新たな塀を設置することとなった。この工事は、解体は業者が行うが、仮囲いの設営、新しい塀の設置はす

べてひのきしんで行う。

作業開始に先立つ8月28日、在籍者有志による仮囲い用の資材搬入、資材置き場の設置を行った。

9月1日からは業者による外塀解体が始まり、3日からは業者が解体した後を追いつながら、ひのきしん者により単管を組み上げ、防災メッシュシートを貼り付けて、仮囲いを設営している。

業者の解体作業が予定より早く進んだため、仮囲い設営も予定より早く進み、9月12日現在、外塀の解体撤去は全て終了し、西側出入口の門柱の姿もなくなっている。



教務部報

修養科第 1019 期 一期講師

今川 聖一

教養掛 (8 月)

主任

樋川 泰士

教養掛

武波 勉

教人登録

青山由紀子 (豊野)

立教 189 年 7 月 7 日

修養科第 1020 期修了

奥田 大介 (周宝)

立教 189 年 8 月 27 日

初席《7 月》

〈1 名〉 尼崎

〈順序運びより〉

月例統計 (自令和 8 年 1 月 1 日 至 令和 8 年 7 月 31 日)

項 目 名 称 () 内教会数	初 席	の お 理 さ 拝 づ 戴 け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	1	1		
鞆 (13)				
東 津 (23)		2		3
吉 野 川 (29)	6	2	2	
島 原 (16)	1	1		
日 方 (15)	3	3		
稗 島 (7)	1	1		
本 津 (2)				
日 高 (2)				
始 良 (5)				1
津 和 (12)				
門 司 (6)		1	3	1
當 別 (6)	3			
大 島 (26)	6	5	2	2
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)	3	1		
四 ツ 山 (5)	2			
大 冠 (2)				
島 下 (1)				
天 保 山 (3)				
青 木 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)	1			
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)		1		1
紀 周 (3)	4			
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫眞洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)	1			
明 道 (1)	2			
芦 東 (1)			1	
和 鎮 (3)		2		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)				
眞明彰化 (2)	9	5	3	
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	43	25	11	8

芦津おちば伏せ込みひのきしん 10/26

- 時 間 ご本部秋季大祭祭典終了後
- 場 所 境内掛西支所前集合
- 内 容 パイプ椅子の撤収及び境内地清掃
作業用手袋をご持参ください

※雨天の場合、中止となります

おやさとふしん
青年会ひのきしん隊

隊員募集！

- 本 隊 11 月 1 日～ 23 日 (1 日のみ入隊も可)
- 1 週間隊 11 月 1 日～ 7 日 (1 日 20 時集合・7 日 16 時解散)
- 家族入隊 11 月 14 日 (土)

詳細は、青年会芦津分会インスタグラムをご覧ください

ようぼく講習会

お道の仲間と共に学び合い 陽気ぐらしの実践へ

ようぼくが、それぞれの立場で陽気ぐらし世界実現に向かってその使命を果たすことができるよう、親里でをやの思召を学び、自分の役割を再確認し、今後の日常生活に活かすための講習会です。

- 対 象 ようぼくで、講義・講話やグループタイム等の講習会受講が可能な方 (年齢は問いません)
- 内 容 1 日コース (3 種類) と 1 泊 2 日コース (2 種類)
- 定 員 いずれも 50 名 (定員になり次第締め切り)
- 申 込 開催日の 3 カ月前から 4 日前まで

詳細は、ようぼく講習会ホームページをご覧ください
問い合わせ：天理教教会本部教養室 (0743-63-2109)

